渋谷区立松濤美術館ができるまで

「白井晟一入門展 第２部／Back to 1981 建物公開」記念記録集

渋谷区立 松濤美術館
THE SHOTO MUSEUM OF ART

渋谷区立松濤美術館ができるまで
「白井晟一入門展 第２部／Back to 1981 建物公開」記念記録集

渋谷区立松濤美術館 編

渋谷区立松濤美術館では、2021年度に開館40周年を記念し、美術館を設計した建築家・白井晟一（1905～1983年）に焦点をあてた、「白井晟一入門」展を開催いたしました。

展覧会は、さまざまな作品・資料によって白井晟一の活動の全体像をたどる「第１部／白井晟一クロニクル 」（2021年10月23日～12月12日）と、晩年の代表作のひとつである松濤美術館そのものに焦点をあてる「第２部／Back to 1981 建物公開」（2022年１月４日～１月30日）の２部制をとりましたが、特に建物自体が展示品となった第２部は大きな反響を呼びました。

ところで、当館ではこの展覧会準備のために、約４年前から様々な方々に、実際に接した白井晟一の姿や、その建築について聞き取り調査を行ってきました。この中で松濤美術館の建設において大きな役割を担った当時の渋谷区営繕課、株式会社竹中工務店の関係者の方々などが、展覧会の開催を目にすることなく、相次いでご逝去されたことは誠に残念なことでした。これら貴重な証言を記録する機会は、刻々と失われていってしまいます。その思いから、ここに「渋谷区立松濤美術館ができるまで」と題して、ささやかながら建設に携わった方々、当時を知る方々、あるいは建築を受け継ぎつないできた歴代の職員の証言をまとめておきたいと思います。

記録集の発行にあたりご尽力いただいた関係者の皆様に心より御礼申しあげます。

白井晟一入門展　第２部 Back to 1981 によせて

渋谷区立松濤美術館では、「白井晟一入門」展の第２部として「Back to 1981」（2022年１月４日～30日）を開催します。当館の40年の歴史において初めて、美術館の建築そのものに焦点をあてます。

渋谷区における美術館の建設は、1977年に23区では初めての美術館建設構想をうたってスタートしました。翌年、白井晟一研究所に基本設計が委託され、株式会社竹中工務店が工事を担当しました。１年３カ月ほどの短い工事期間にも関わらず、建物に対しより高度な美を追求する白井と、動線や機能性に配慮する当時の営繕課を中心とした区側により、改変が重ねられていたことが記録からわかります。建設に携わった人々の努力と情熱は、「私の全力をだし切った」という白井の言葉からも伝わります。その後1981年10月１日に、板橋区立美術館に次ぐ２番目の区立美術館として開館しました。

千平方メートルほどの敷地に実現した白井の設計思想は、工夫を凝らして配された展示室など、その実際を美術館でこれから実見していただけます。一方で、美術館建設懇談会の専門委員をつとめた美術評論家・土方定一は、白井の大意は「小さい機能から出発しないで、ひとつの空間を自由に使う設計である、ということである」と述べていました。白井自身も「美術館は生き物だよ」と発言し、建物が本当に生かされるかは、運営側や来館者も含め、使う人々の創意にかかっていると考えていました。

この建物を舞台に、当館ではこれまで特別展や小規模展を合わせて259本の展覧会を開催し、これにともなう寄贈などによって、収蔵品なしのスタートから、1700点余の作品・資料を所蔵するに至っています。収蔵品の一部は、２月からのサロン展「松濤クロニクル 1981→2021」（2022年２月12日～３月13日）でご紹介する予定です。開館40周年を機に、建物を1981年、すなわち竣工当時の空間に戻し公開することは、改めてこの空間が存在したことによって生み出されてきたもの、この空間が存在するからこそ、これから生み出すことができるものについて考えを巡らすことができる、千載一遇の機会となるかもしれません。

2022年１月
渋谷区立松濤美術館

（※白井晟一入門展 第２部 挨拶文再掲）

On the Occasion of *This is Sirai Seiichi Part 2: Back to 1981*

It is with great pleasure that we present *Back to 1981* (Jan. 4 to Jan. 30, 2022), the second part of an exhibition titled *This is Sirai Seiichi*. This exhibition marks the first time in the history of the Shoto Museum of Art that we are focusing on the museum's architecture.

The construction of the museum in Shibuya Ward was rooted in the 1977 passage of the Museum Construction and Conception Plan, one of two plans to build the first art museum in any of Tokyo's 23 wards. The following year the Shirai Seiichi Institute was commissioned to oversee the basic design of the building, and the Takenaka Corporation was placed in charge of the construction. Despite the short construction period of 15 months, it is clear from documents related to the project that a series of modifications were undertaken based on Shirai's pursuit of a higher level of beauty for the building, and the ward, or more precisely, what was then known as the building and repairs department's concern with flow lines and functionality. The effort and passion of those involved with the construction is also evident from Shirai's comment that he put everything he had into the project. The building was subsequently opened in October 1, 1981 as the second public museum in the wards after the Itabashi Art Museum.

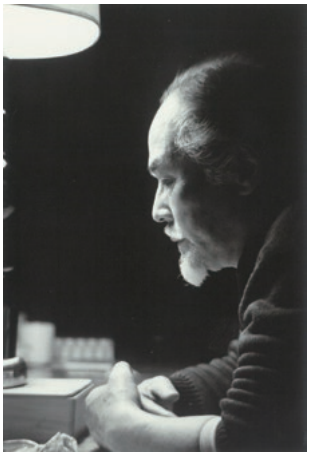
Today, you will have an opportunity to actually observe Shirai's design concept, realized on an approximately 1,000 square-meter lot, which includes an ingenious arrangement of galleries. The artcritic Hijikata Teiichi, who served as a technical advisor on the Museum Construction Panel, summed up Shirai's general approach as "a design to use a space freely without worrying about minor functions." Shirai himself said that museums were "living creatures," and believed that whether or not a building came to life depended on the creativity of those who used it, including the management and the visitors.

With this building as a setting, the museum has held 259 exhibitions, including both special and small-scale events. In addition, the museum's collection, which began with nothing, now totals some 1,700 items, with a number of gifts among them. A selection of these works is scheduled to be presented in a salon exhibition titled *Shoto Chronicle: 1981→2021* (Feb. 12 to Mar. 13, 2022). The fact that we have been able to return to the space as it was at the time it was constructed in 1981 in order to commemorate the museum's 40th anniversary provides us with a golden opportunity to consider what has been created due to the existence of this space, and moreover, what will be created here in the future.

The Shoto Museum of Art
January 2022

(※Greeting for *This is Sirai Seiichi Part2* is reprinted)

白井晟一（1905〜1983）略暦



白井晟一研究所蔵

1905年２月京都に生まれる。幼少期に父を亡くし、義兄の画家・近藤浩一路（こういちろ）の家庭で育った。京都高等工芸学校（現在の京都工芸繊維大学）図案科を卒業した後に渡独し、ハイデルベルク大学哲学部にて美術史と神学を専攻、このときにゴシック建築などの知識を得る。留学中はたびたびパリへ遊学し、林芙美子や今泉篤男、アンドレ・マルローら知識人との親交を深めた。その後ベルリン大学へ移るが、白井は勉学よりもむしろ邦人向け左翼新聞『伯林週報』の編集を行うなど社会主義的な運動への関心を深めていったようである。

1933年、ドイツ留学を終えて帰国し、《河村邸（旧近藤浩一路邸）》（1935〜36年）、《歓帰荘》（1935〜37年）などの設計を皮切りとして建築家としての道を歩み始める。戦後は代表作《秋ノ宮村役場》（1950〜51年）や《親和銀行本店・懐霄館》（1966〜75年）、遺作となる《雲伴居》（1983〜84年）まで数々の作品を手掛け、高村光太郎賞（造型部門）、建築年鑑賞、日本建築学会賞、毎日新聞芸術賞、日本芸術院賞を受賞。現在では日本を代表する建築家の１人に数えられている。

1960年以降は書に没頭し顧之昏元（こしこんげん）と号して個展を開催するほか、作品集として『顧之居書帖』三部作を遺している。また、日本画家・漫画家としても著名だった近藤浩一路や、中央公論社社長の嶋中雄作との縁により、書籍装丁の仕事も数多く遺している。

凡例

- 各証言は、一部を除き松濤美術館の歴史の中で証言者が携わった仕事の順番にしたがって掲載した。
- 各証言は、主に録音データをもとに編集し、その要約を掲載することとした。ただし柿沼守利氏（PP.21〜22）は寄稿、佐藤克弥氏（PP.23〜24）は手紙を収録することとした。
- 各証言者に関する説明を冒頭に太字で記した。また一部の証言に対してはその補足を文中に（　）にて付した。ただしPP.21〜22およびPP.23〜24の文中の（　）および［　］の表記は原文のままとした。
- 証言中の敬称は適宜省略した。
- 各証言の編集・要約は渋谷区立松濤美術館の平泉千枝、および木原天彦が担当した。
- 各証言内容は個々人の記憶に基づくため、記憶違いや、個人的な見解が含まれる可能性があるが、今回は証言の記録に重きを置いた。
- 英訳はクリストファー・スティヴンズが担当した。
- 表紙、表紙裏、およびPP.6〜13の写真撮影は上野則宏による。

目次

白井晟一入門展　第２部 Back to 1981 によせて …… 2
On the Occasion of *This is Sirai Seiichi Part 2: Back to 1981*

白井晟一（1905〜1983）略暦 …… 4

渋谷区立松濤美術館、2021年現在の姿 …… 6

一次図面（1978年６月頃） …… 14

二次図面（1978年10月） …… 15

三次図面（1979年７月以降） …… 16

渋谷区立松濤美術館建設年表 …… 17

区立美術館建設懇談会について …… 18
渋谷区立松濤美術館学芸員　平泉千枝

青木茂氏インタビュー …… 20

渋谷区立松濤美術館のおもいで …… 21
柿沼守利

佐藤克弥氏よりの手紙 …… 23

古本凡夫氏インタビュー …… 25

中澤正氏インタビュー …… 28

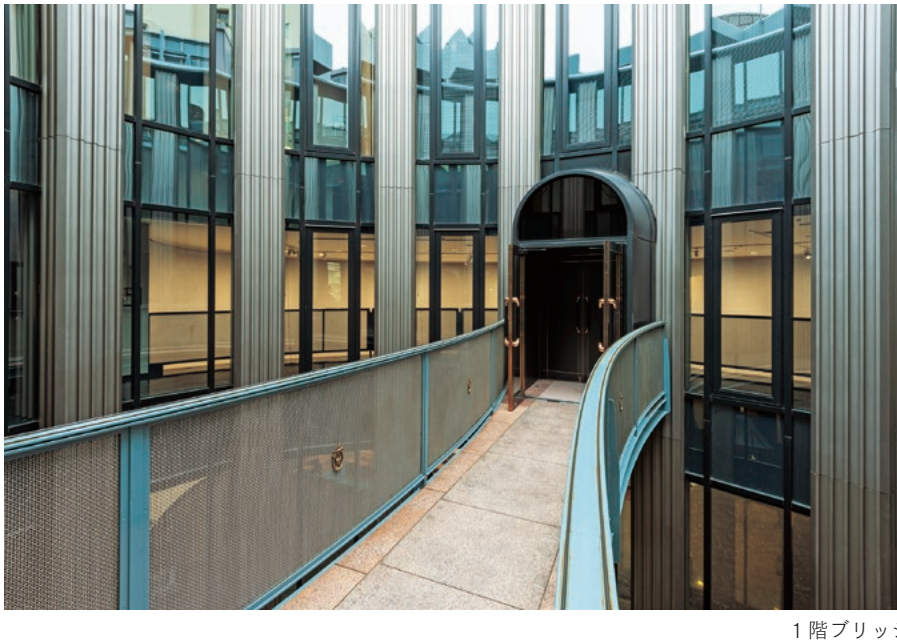
瀬尾典昭氏インタビュー …… 29

中村文明氏インタビュー …… 31

建物のちから―松濤美術館50周年への期待 …… 32
渋谷区立松濤美術館前副館長　高波眞知子

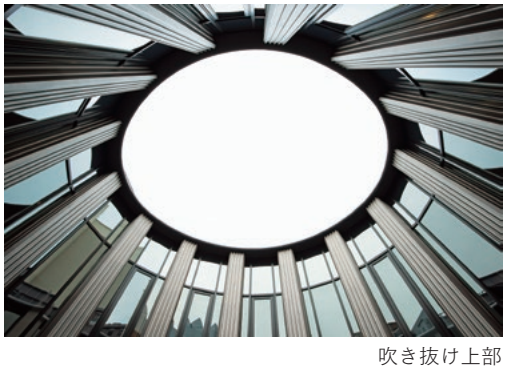
渋谷区立松濤美術館、2021年現在の姿

1 階エントランス



1 階ブリッジ

ブリッジと吹き抜け



吹き抜け上部

吹き抜け下部

1 階エントランスから事務室へつながるドア

1 階エントランスからエレベーターホールをのぞむ

螺旋階段

螺旋階段

地下１階展示室

２階サロンミューゼ

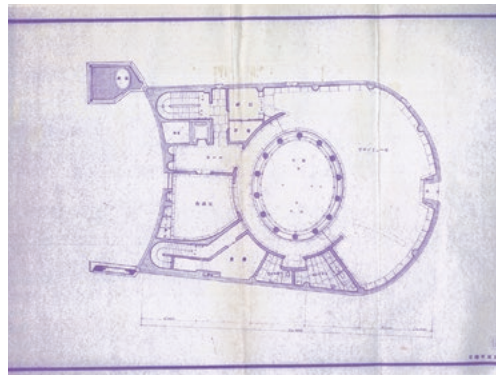
地下２階ホール

地下２階和室西側

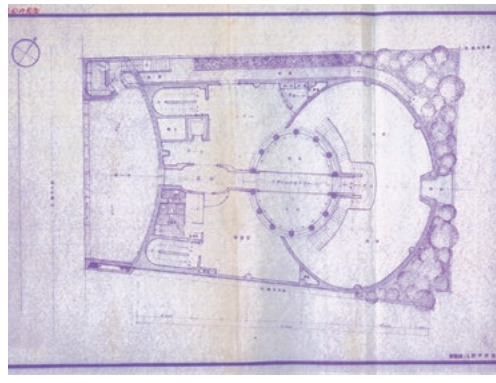
地下２階和室東側

2階館長室（会議室）

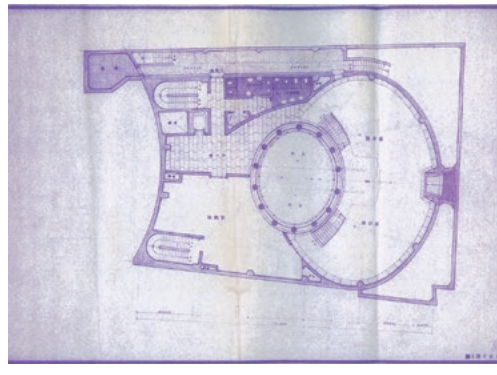
一次図面（1978年６月頃）
渋谷区立松濤美術館蔵



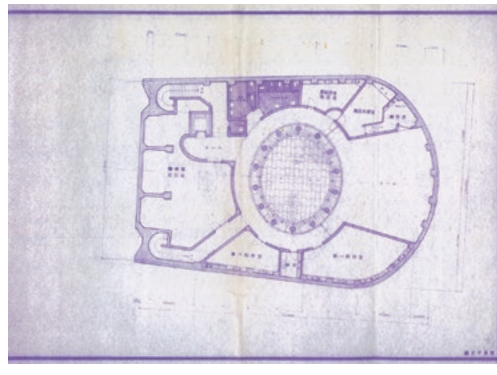
２階平面図



１階平面図



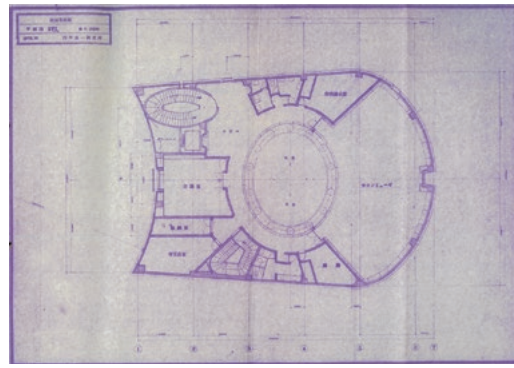
地下１階平面図



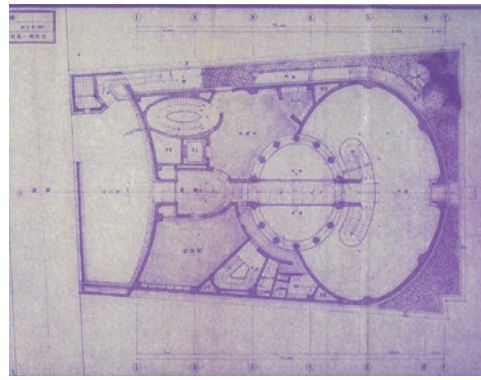
地下２階平面図

二次図面（1978年10月）

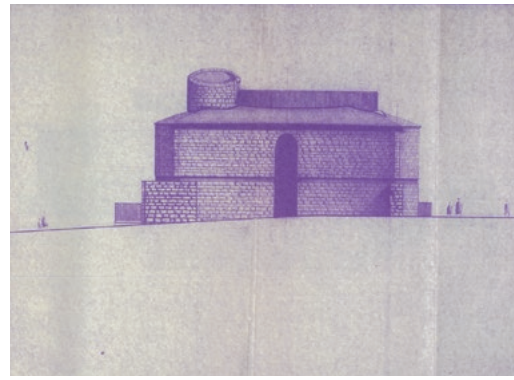
渋谷区立松濤美術館蔵



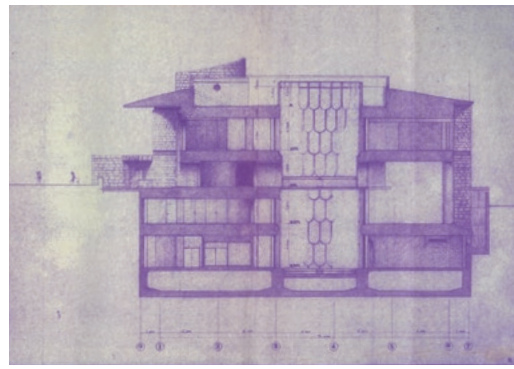
２階平面図



１階平面図



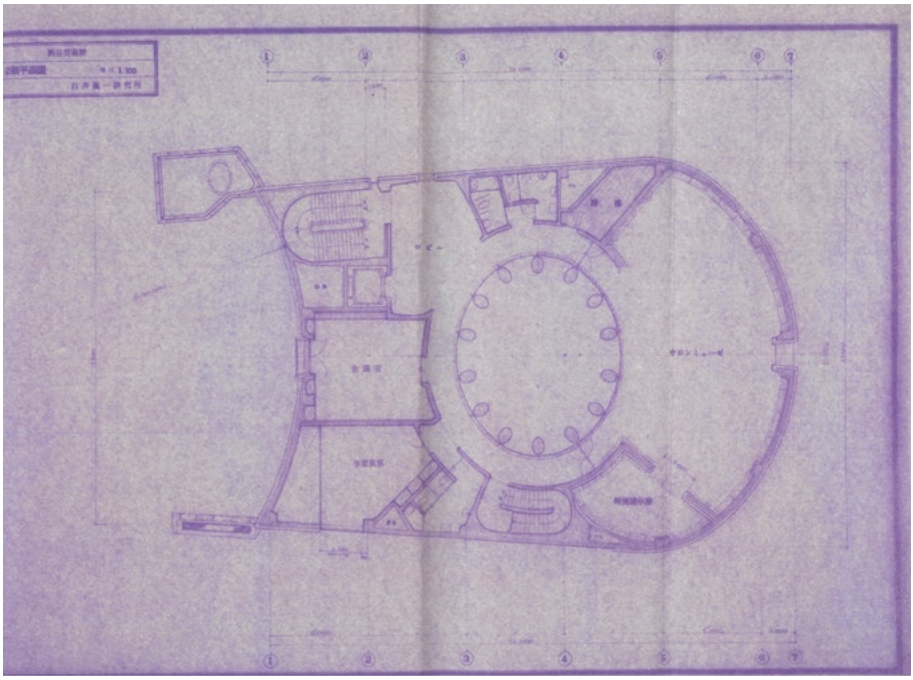
西側立面図



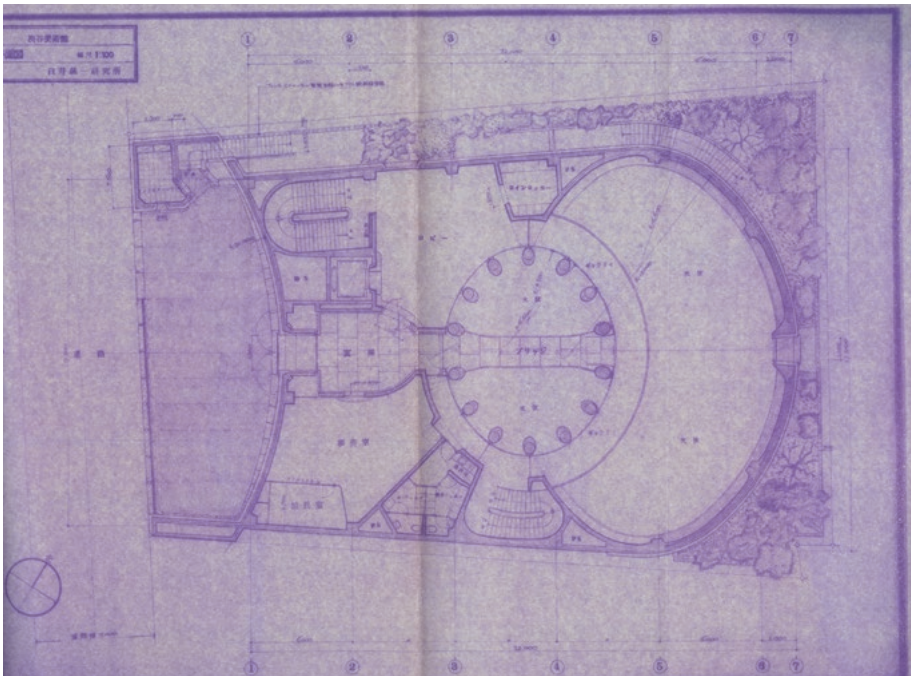
西－東断面図

三次図面（1979年７月以降）

渋谷区立松濤美術館蔵



２階平面図



１階平面図

渋谷区立松濤美術館建設年表

1973(昭和48)年３月　「渋谷区長期基本計画」が策定され、この後その実施計画案のなかに美術館建設計画がもりこまれる。

1977(昭和52)年　年度当初予算の中に、23区では初めての美術館建設構想計画をうたい、準備予算を計上。美術館の建設予定地として「元土木事務所跡地」(渋谷区松濤２丁目14番14号)が予定される。

1977(昭和52)年12月　第１回区立美術館建設懇談会開催(1980年10月まで全６回開催)

＊専門委員８名:土方定一(美術評論家)、白井晟一(建築家)、千沢槙治(美術評論家)、亀倉雄策(デザイナー)、蘆原英了(音楽・舞踊評論家)、大久保泰(洋画家)、堀内正和(彫刻家)、脇田愛二郎(造形美術家)

1978(昭和53)年４月　白井晟一研究所に基本設計委託

1978(昭和53)年９月　渋谷区議会において美術館建設予算可決(予算額806,635,000円)

1978(昭和53)年10月　実施設計完成

1978(昭和53)年12月　株式会社竹中工務店東京支店工事請負契約(契約金額787,000,000円)

1979(昭和54)年２月　工事着工(２月19日安全祈願式)

＊この後、５月から年末にかけて、「B1階展示室内の階段→回廊に変更」「２階特別展示室(特別陳列室)と厨房位置入れ替え」「中央吹き抜けのアルミグリル取りやめ、柱の形状変更」「ドライエリアの外壁仕上げを御影石→コンクリートハツリ仕上げに変更」などの設計変更が協議され、10月には外壁を恵那錆石から韓国産御影石(紅雲石)に変更することに関して、白井晟一への聞き取りが行われる。

1979(昭和54)年４月　美術館準備室設置、翌々年の81年２月に藤田國雄(元東京国立博物館次長)が室長として就任、同年９月に初代館長に就任(～2003年３月)

1980(昭和55)年５月８日　美術館建設工事竣工

1981(昭和56)年10月１日　開館、一般公開

建物概要

敷地面積　1,034.57㎡
建物構造　鉄筋コンクリート造
　　地上２階地下２階建
建築面積　618.40㎡
延べ面積　2,027.18㎡
　　(塔屋 29.48㎡／２階 461.20㎡／１階 305.50㎡／地下１階 623.95㎡／地下２階 607.05㎡)

建設費

主体建築費	787,000,000
付帯工事費	9,880,000
地質調査費	845,000
設計委託費・工事技術指導料	36,385,000
初度備品費	114,040,000

1979年2月19日　安全祈願式　画像提供:佐藤克弥氏

区立美術館建設懇談会について

渋谷区立松濤美術館学芸員　平泉千枝

渋谷区立松濤美術館の建設工事着工の約14カ月前の1977年12月、8人の専門委員と天野房三・渋谷区長などが集合し、第1回の「区立美術館建設懇談会」が開かれた。その後1980年10月まで全6回開催されるこの「懇談会」では、委員と渋谷区によってこれから建設する新しい美術館に関する議論が重ねられ、実質的には「美術館建設準備委員会」に近い役割を果たしたと考えられる。その設計思想にも大きく関わったと思われる同会の活動の一端に関して紹介してみたい。

○専門委員について

委員の顔ぶれは、土方定一（美術評論家）、白井晟一（建築家）ほか、千沢楨治（ちざわていじ）（美術評論家）、亀倉雄策（デザイナー）、蘆原英了（あしはらえいりょう）（音楽・舞踊評論家）、堀内正和（彫刻家）、大久保泰（洋画家）、脇田愛二郎（造形美術家）。土方は、日本最初の公立近代美術館、神奈川県立近代美術館で長く館長職にあり、千沢も東京国立博物館学芸部長などを務め、学芸・行政の両面に精通するエキスパートだった。また、渋谷区在住の蘆原をはじめ、渋谷にゆかりのある委員で構成され地域性が強く意識された人選でもある[1]。この時点では東京都に他の「区立美術館」は存在せず、美術家たちから「へーッ、区が美術館を造るの」という反応すらあったという[2]。先行モデルが無いなかで、区が専門家らの意見を聞きながら地域に密着した新たな美術館像を模索したことが窺える。

区はまず土方に相談し、その勧めで会が発足された経緯があったという[3]。委員の脇田は「懇談会では、土方さんがかなり積極的に発言されていたと思う。私はメンバーのなかで一番若かったせいもあり、建築についても意見を言ったのですが、あまり聞き入れてはもらえませんでしたね」と述べる[4]。土方は「戦後の地方美術館は土方氏の“鎌倉近美”を常に教科書にしてきた」[5]と言われるほど各地の地方公立美術館設立の指導的立場にあり、懇談会でも主導的な役割を担ったとみられる。

○建築家・白井晟一の選出について

白井には1977年時点まで美術館建設の実績は無く、なぜ新美術館の設計が託されたのかは実は未解明な部分も多い。当時の渋谷区営繕課の係長・佐藤克弥は「第1回の懇談会を開いてから回を重ね、翌1月に設計を白井晟一先生に依頼することを、区と同懇談会の総意によって決定した」[6]とし、委員の千沢は「設計を白井氏に委嘱するようにと、全員が推薦した。これが第１回の会議の最も大きな収穫であった」と述べている[7]。

ただ、唯一の建築家として「懇談会」に入っている時点で、白井が設計を受け持つことは既定路線であったようにも見える。なかでも土方は1978年に自館で白井の義兄で画家の近藤浩一路の展覧会を開催し、白井と緊密な交流があった。よってすでに土方が白井を推薦していた可能性も考えられるが確証はない。

区長の天野は「渋谷区で美術館をつくるなら、建物そのものにも魅力あるものをと考えていた。計画がスタートしたころ、2度ほど白井さんを訪ねこちらの話をじっくり聞いてもらったことがある。私としては、大先生にこのような小さな建物をお願いするのは気が引けたのだが、白井さんは『小さいことが特色になるような建物もある』と言ってくれた。その言葉通り、小さくとも建物自体が美術品となるような美術館ができた」[8]と述べている。また佐藤は美術館について「すべての区民が気楽に利用できる憩の場となるように、したがって建物の外観はもちろん、内部に一歩踏み入れてからも、また訪れたくなるような魅力をもった建物をつくりたいと考えが立てられた（原文ママ）」[9]としている。個性的な建築で知られた白井の選出は、建築の「魅力」に重点をおく区側の意図を反映したものでもあったのだろう。

○美術館の方向性と建築について

第1回の懇談会の後、翌年1978年6月に基本設計と模型が出来上がり、10月に実施設計が完了する[10]。この間、懇談会での議論がその設計に反映されていったとみられる。例えば、喫茶も

備えた2階の展示室「サロンミューゼ」は、懇談会の提案に基づくものだったという[11]。作品に囲まれお茶が飲める、新宿の中村屋サロンを想起させるような館内喫茶は2009年度まで稼働していた。白井自身は、竣工後のインタビューでこれが独特と指摘されると、「独特だかどうだか知らないが、こういうミュージアムの構成の実例は知らない」[12]と答えている。前例が無いなかでも「憩の場」をつくるという懇談会のコンセプトを具現化するために設けられたものだった。

同インタビューで白井が「最初から区民のための美術教育には熱心な要望もあり、美術諸分野の実習室。デザイン教室。資料研究の図書室。映画室。そりゃみんなつくりたいさ」と述べているのも、懇談会からの要望を指すと思われる。区立という性格上、様々な教育機能が求められたものの、限られたスペースゆえに苦労した様子が窺える。

出発点からの問題もあった。美術館建設を推進した区長の天野は、予算的な問題で反発を受け「美術品を所蔵しない方針でもあったことから、ようやくゴーサインが出された」[13]という。彼は(収蔵品として)「岸田劉生の代表作である『代々木切通し風景』(現東京国立近代美術館所蔵《道路と土手と塀(切通之写生)》)のような渋谷区に関係があるものが欲しい」[14]とも述べており、実は作品収集を完全には諦めてはいなかった模様だ。ただ少なくとも新美術館は通常その館の個性や性格付けの指針となるような所蔵作品を持たなかった。従って、白井には建築でそれに代わるような個性を発揮すること、また将来の未知の展覧会や美術館活動に対応できる空間を創出すること、という矛盾するような重責が課されることとなる。委員たちにも白井の設計にかかっている、という思いはあったのだろう。千沢は(白井に設計を任せたことで)「これで渋谷区立美術館の方向と性格が決まったようなものである」[15]と述べている。

竣工後に白井が「どんな作品にでも似合う空間をつくることは不可能、だからどんな作品にも似合わない空間をつくっていい。それが逆に、どんな作品にでも合う“自由な美術空間”となるのではないか……」[16]「この建築が本当に生かされるためには、これからの区民及び担当者の創意ある、クリエイティヴな運営の仕方を確立しないと」[17]と述べるのは、白井なりに難題に応えた「自由な美術空間」を創り上げ、後は運営側や観衆などその空間を使う人々に託したという思いがあったのだろう。

○懇談会その後

懇談会はその後1980年5月の建物竣工を経て、10月の第6回を最後に解散となる。土方が同年12月に、蘆原が81年3月に相次いで逝去し、継続が難しくなったと推測される。そのため残念ながら懇談会での議論は、その後の美術館の中にあまり継承されることがなかったようだ。翌年1981年2月に準備室長、9月に新館長となる藤田國雄(在職:2003年3月迄)の「博物館〔美術館〕を成り立たせるのは人、もの、建物だといいます。が、なんといっても人ですね。もの〔資料〕を集め、扱い、見せるのは人です。建物は目的に合わせてあとで考えればよい。ところがいまの日本では建物だけ先にできてしまう」[18]という就任直後の発言は、自由な美術空間を創ったという白井はじめ懇談会の思いとすれ違ってしまっているように感じられるからである。しかし、美術館の出発点にあるこの懇談会については、今一度ふり返ってみることが必要かもしれない。

1 千沢楨治「渋谷区立松濤美術館開館を間近にして」『近代建築』、35巻1号、1981年1月、p.58
2 「お茶・音楽つき憩いの美術館」朝日新聞、1978年9月12日、朝刊、東京版、p.20
3 「渋谷区立松濤美術館」『日経アーキテクチュア』、124号、1980年12月、pp.62-63
4 「有名建築その後:渋谷区立松濤美術館」『日経アーキテクチュア』、489号、1994年4月、pp.146-149
5 「土方定一さん死去」朝日新聞、1980年12月23日、夕刊、p.9
6 『建築文化』、36巻411号、1981年1月、p.133
7 前掲註1『近代建築』、35巻1号、p.53
8 前掲註4『日経アーキテクチュア』、489号、p.148
9 前掲註6『建築文化』、36巻411号、p.133
10 前掲註6『建築文化』、36巻411号、p.133;『DA 建築図集 美術館II 地域の小美術館』、彰国社、1982年9月、p.8
11 前掲註4『日経アーキテクチュア』、489号、p.147
12 「松濤美術館　白井晟一先生に聞く(インタビュー:1980年12月)」『白井晟一研究III』、南洋堂、1981年2月、pp.93-95
13 前掲註4『日経アーキテクチュア』、489号、p.147
14 「文化の渋谷に区立美術館」、読売新聞、1978年9月16日、朝刊、都民版、p.20
15 前掲註1『近代建築』35巻1号、p.53
16 「時の人:渋谷区立美術館を建てた白井晟一」『芸術新潮』、31巻7号(367巻)、1980年7月、pp.64-65
17 前掲註12『白井晟一研究III』、p.95
18 「人:開館した東京・渋谷区立松涛美術館の初代館長藤田国雄さん」、赤旗、1981年10月16日、日刊第11185号、p.6

青木茂氏インタビュー

2019年8月21日収録、場所：東長崎駅南口某所、聞き手：平泉・木原、要約：平泉

青木茂氏（美術史家）は、神奈川県立近代美術館で1978年7月8日～30日まで開催された「近藤浩一路展」の開催準備のため、近藤の義弟である白井晟一の自邸《虚白庵》を度々訪ねていた。渋谷区立松濤美術館、静岡市立芹沢銈介美術館（ともに1981年開館）の建設時期と重なり、当時の白井の素顔を知る学芸員として貴重な存在である。内部は漆黒の空間として知られた《虚白庵》（1967～70年）のお話をうかがった。
※2021年11月15日にご逝去された青木氏を偲び、その語り口のままに掲載した。

近藤浩一路の展覧会やったのよ。その当時鎌近（神奈川県立近代美術館、鎌倉）で。作品どこにあるっていったら白井晟一のところにあるっていうんで。だもんだから白井晟一と交渉する以外なかったのよ。それで知り合ったのよ。いつ頃？そんなことは知らないよまあ（1932年生まれの青木氏が神奈川県立近代美術館の学芸員として勤務していた）40から50の間だよ。

（渋谷側では当時神奈川県立近代美術館の館長であった土方定一が松濤美術館の設計者に白井を抜擢したという噂があった、という証言があるという質問に対して）そんな感じではなかったな。それはねえ、白井の方がずっと役者が上だもん。年は知らないけど、格が違ったもん。ずっとずるいしさ、人間が大きいしさ。

（展覧会以後も何度か事務所に呼ばれて）あるとき事務所《虚白庵》に行って待っていたら、事務所っていうのは「原爆シェルター」、ものすごい厚い玄関のドアなんだよ。そしてわりあいと軽く開けられるの、手を離すとゆっくり閉まるんだよ。良く出来てるんだよ。そしてねえ、ドアが閉まると真っ暗になって何にも見えない。奥に白井の机があってねえ、小さな手元灯がついてるの。横に小さな椅子があって俺なんかそこに座るの。

待ってるとねえ、静岡市長はじめ偉い方々がねえ、芹沢銈介美術館の設計を頼みにきたの、まさにその日。交渉がいろいろあって正式に来たんだろうなあ。そうするとねえ、物凄く厚い絨毯が敷いてあるの。真っ暗な中で、見えるのはねえ向こうの方に誰か人がいると。しばらく居れば見えてくるけど。何にも無いんだから。（物はすべて壁裏に収納式になっていて）カッコいいんだから。恐る恐る行くだろ。初めて来たばかりさ、見えっこないだろ。そうすると絨毯に段があるんだよ、これは引っ掛かるんだよどんな人でも、どんな運動神経のいい奴でもよろけるんだよ。白井晟一は引っ掛からない。そしてだよ、そうするとうふふ、と笑うんだよ野郎が。それだけで、完全に負けだよ。お説ごもっともで、と言うよりない。ちゃんと出来ちゃってるんだよ。

渋谷区立松濤美術館のおもいで

白井晟一研究所在籍1968年～1984年　柿沼守利

この度渋谷区立松濤美術館の開館40周年を記念した「白井晟一入門展」を機に、43年前の朧げなる記憶を辿ると、すべてのことごとが懐かしくその断片が蘇る。

最初に浮かぶのは佐藤克弥氏である。氏は当時営繕係長の職にあり、天野房三区長の信頼篤く、美術館の計画当初より竣工に至るまで、終始渋谷区側の代表者としての役割を果たされた。

先ず、当時の天野房三区長が、美術館の建設を提唱されたと記憶するが、氏は嘗て武蔵野美術大学の通信教育学科にて油彩を学ばれておられた。担当教授が沼沢仁と言う私と旧知の画家であったことも奇縁といえる。

公務で日々多忙な中、北海道から九州まで写生旅行に出かけ、区内に於いてグループ展や個展を多く催されていた。が、「絵の出来と旅行の遠近は無関係で表参道でも絵は十分に描けるはず」と夫人から言われたと苦笑されていたことをいま思い出す。

美術館計画の初期段階において、渋谷区役所内で建設懇談会が開催され、土方定一氏（当時神奈川県立近代美術館館長）が座長を務められた。メンバーは他に堀内正和、蘆原英了、亀倉雄策、千沢禎治、脇田愛二郎、大久保泰、白井晟一の８名であったと記憶する。

美術館計画当初、天野区長は度々白井晟一研究所を訪ねられ、その際には佐藤克弥氏を伴うことが大半であった。はじめの頃は社会教育課長や教育長、営繕課長の本多氏も同行されたが、次第に佐藤克弥氏のみになっていった。

佐藤氏は、入省して直ぐ営繕課に在籍し、初めの頃は学生服で登庁されていたと聞く。当時すでに天野氏は渋谷区の部長であったそうだ。

佐藤氏の人柄は篤実そのもの。几帳面で厳格な性格は、およそ役人のそれとは思えず、ときに部下から煙たがられることがあったとも聞く。私はあらゆる打ち合わせにおいて、氏に相談をする習慣を身につけるに至ったが、白井先生は初対面から氏の性格を見抜かれ、諸々の打ち合わせはすべて佐藤氏とされることとなる。

当時の営繕課では当然のことながら、同時に他の建築物件を数多く抱え、スタッフは日々多忙を極め、残業が当然のような状況下にあった。施工中に度々設計変更が行われた松濤美術館では、その都度議会対応の準備に忙殺されて、営繕課の部屋の明かりが遅くまで灯ることが屢々（しばしば）であったと聞く。また、この現場の電気工事を除く設備全般を岡野辰夫氏が担当され、佐藤氏とのコンビネーションを組まれていて、2人はよく気脈が通じていた。

設計期間中には佐藤氏と私で佐世保の親和銀行本店、長崎の大波止支店、そしてひろしま美術館、山梨県立美術館、長野県菅平にある区の保養施設など多くの建物を共に見学した。また、工事中には、茨城県への石材加工の検査、葛西の金属製作工場に階段手摺の仕上がり状況のチェックなどへ出向き、時には先生が同行されることもあった。

私自身、官庁工事が初めての経験であったこともあり、議会承認という「手続き」の認識がなかったことも、佐藤氏に負担を負わせる結果となった。先生の指示による外壁石材の変更や、設計プランなど多くの変更が行われたが、その度議会対策に於いて常に佐藤氏が間に立たれて区側と白井晟一研究所の調整をされ、その準備に多くの時間を割かれていた。これらに関しては本人でしか分からない苦悩を抱えておられたと想像する。長い時間を佐藤氏と共にした私は胃痛で苦しまれていた氏の姿を今もはっきりと覚えている。

天野区長からは工事の合間に何度か、私と竹中工務店の現場員を区内にある、羽澤ガーデンにおいて会食の機会を持って頂いた。また、このころ先生が日本芸術院賞(1980年)を受けられ、営繕課のほぼ全員の方々が参集し、祝いの会を催され、記念品としてライターを贈呈されたことも工事期間中の思い出として残る。

竹中工務店の現場事務所と白井晟一研究所の事務所は、松濤公園の近くに建てられた二階建プレファブであったが、当時はまだ、各工事現場に賄いの制度が残っていて、事務所内で食事をとる習慣があった。年末には竹中工務店・蓮井主任の音頭とりで餅つきが行われ、関係する各々の家族も大勢参加し、佐藤氏と私も子供連れで参加した。

１年４ヶ月に及ぶ工事期間中、先生は月に２度ほどの割合で現場に見え、時には滞在先の京都から直行され、東京駅からの送迎を佐藤氏と共に行うこともあった。

1981年５月８日に竣工し、約半年ほど期間を置いたのち開館の運びとなる。直後は何かと手直しなどの雑事が多く、毎週のように美術館に出向いた記憶がある。

その後も、わたしと佐藤氏そして営繕課の方々との交誼はつづき、数多くの国内研修旅行をはじめ、イタリアへの旅も経験する。佐藤氏との交誼は2018年、氏の遠逝まで続いた。

開館40周年の記念として、白井晟一展の企画が決まり、2018年６月27日のインタビューには病を押して佐藤氏が参加された。亡くなる１ヶ月前であった。当時の高波副館長、平泉学芸員も同席されたその会合は忘れ得ぬものとなった。

2013年経年劣化のため開館以来初めての大掛かりな改修工事が行われ、建設当時の担当者であった竹中工務店の中澤正さんがこの時も担当され、約１年に及んだ工事が仕上がった際、天野元区長をはじめ、当時の関係者が新装なった美術館で一堂に会したときのことは記憶に新しい。

然しながら、いまや先生をはじめ天野氏、佐藤氏そして中澤氏までもが泉下の客となり、星霜の流れを痛感する。また、いつの頃からか天野氏を囲んで佐藤氏、岡野氏、そして時には古本氏ら当時の関係者が毎年11月に集うことが恒例化していたが、思えばその交誼の期間は、美術館竣工後の方が遥かに永く40年近くに及ぶこととなった。

佐藤克弥氏よりの手紙

2018年６月27日、松濤美術館建設当時渋谷区の建築公害部営繕課 第１営繕係の係長としてその任にあたった佐藤克弥氏に対するインタビューを行った。佐藤氏は、建設当時に白井晟一研究所・株式会社竹中工務店に対して渋谷区側の連絡や調整を一手に担う立場にあり、白井からの信頼も極めて厚かった。しかしインタビュー時ご体調を崩されており、その後これを補完するように当時の記憶を振り返った７月９日付のお手紙をいただいた。そこには貴重な記録となる証言が綴られており、今回ご遺族や関係者のご許諾をいただいてここに一部編集し収録することとした。

佐藤氏はその後間もない７月29日に79歳でご逝去された。インタビュー時には松濤美術館で展覧会開催予定があることを知り、嬉しく思っておられたご様子で、「天国に行ったら白井先生に展覧会が開かれるとご報告できます」と口にされていた。謹んでご冥福をお祈りいたします。

高波眞知子様・平泉千枝様

先日は、お伺いいたしまして、はじめてお目にかかりましたが、お二人の松濤美術館に対する思いと、白井晟一についての知識欲と情熱に感心いたしました。
もう少し早くお目にかかり、私がこのような状態になる前に、色々とお話ができたらと思いますと残念でなりません。ぜひこのままの情熱を持続されまして、2021年に白井晟一展が実現し成功されることを、こころから祈念いたしております。

中略

渋谷区立松濤美術館建設・設計変更に関すること

松濤美術館建設工事施工業者決定時に、一定金額以上のものについては、区議会に対して契約事案として諮るのですが、外壁については当初の設計で恵那錆（えなさび）という花崗岩でしたが、そのすばらしさを説明するのに、松濤町に丁度石垣として使用しているお家があり（旧観世能楽堂と戸栗美術館の中間）そこを視察したほどの力の入れようでしたが、いざ外壁に取り掛かる前に、白井先生のほうから韓国産花崗岩（後に先生が紅雲石（こううんせき）と命名）を使用するとのことで韓国まで視察に行ってしまいまして、区としては大慌てで、設計変更の起案をほかの変更項目と一緒に階段の形・柱の形等全部取り出して工事金額±０というありえない書類を作成し議案として提出したのですが、矢張りおおもめにもめまして、徹夜議会になる有様でした。ちょうどその時期に営繕課長が海外研修で不在のため、私が待機する羽目になり、どうしても納得されずに、先生のお宅に理由を訊きにテープ持参で伺いまして、その声を持ち帰り四役（区長・助役・教育長・収入役）で対策を練ったところでした。やっと了承されたときには、本当にほっとした思い出があります。

松濤美術館建設工事施工当時、区営繕課では私の基本設計による大型工事が重なりまして［宮益坂商工会館（御嶽神社併設）・恵比寿社会教育館（監督員 古本）・区役所本庁舎保健所増築・長野県菅平青少年山の家］等、私もかなり忙しく、くい打ち工事（アースドリル工法）は1979年の冬入区２年目の職員に頼んで見てもらっていたのですが丁度その時期に白井先生が現場視察に見えて、先生愛用の整髪クリームを東横本店まで買いに行ってもらった

こともありました。

工事をするためには、敷地内に監視員事務所を整備しなければならないのですが、当現場では、敷地が狭く、竹中工務店が松濤公園と道路の間にかなり大きな空き地を見つけて借り、そこに１階が炊事場と食堂（飯場というもの）、２階が竹中の監視員事務所の１棟と、１階が洗面所・下請け会社の詰め所、２階が、白井事務所（柿沼さんがおおよそ常駐）と区役所監督員事務所のプレハブを作りまして、正月に竹中がそこで餅つきをして、私の長男と、柿沼さんの長女がおない年で、招待を受け参加させてもらい、良い思い出になりました。
先のくい打ちを手伝ってもらった職員は、飯場の経験が初めてとのことで感激しておりました。

当美術館開設後、何年たったころか忘れましたが、館裏側に７軒ほどあった住宅が買収されて、建築工事が始まり、土留め工事をした後地下約５メートル程度まで掘削が始まりました。私は館に対する影響が心配で、毎日のように見回りました。そうしますと、やはり当館の護壁や敷地等に多数のひび割れが入り始めまして、あわてて施工業者の監督員を呼び確認させ、すぐに応急処置をするとともに、工事の中止を求めました、相手側は応急処置として、敷地一杯の水を張りまして、沈下は一時的に止まったのですが、相手側監督員は点検の際ゴムボートを使用しておりました。完成後は、クラック等は補修してもらいました。その建物は数年して取り壊され、現在は別の所有者になっております。

正面、上部のひさし、および竪格子は、当初設計では、真鍮の真物を磨き、そのうえにクリア塗装でしたが、何年かすると黒く変色してしまいまして、私担当で塗装工事を発注して、きれいに磨かせたのですが、足場の上から職人が挑戦したのですが、上向き作業にとうとう悲鳴をあげまして、結局全部はずして地上で磨いたのですが傷に入りこんでなかなかきれいにならず、大変苦労したところです。
したがって次回の塗装工事から、真鍮に最も近いペイントでしてしまい、先生健在であれば大目玉を食うところでした。当然、柿沼さんも気に入らなくて現在にいたっております。

竣工後、先生の発案で、きわめて高価な備品（机・椅子等）を購入して、一時地下２階に仮置きしていたのですが、ある日大雨警報が出まして、中央の池があふれ出すと困りますので、係員全員に召集をかけて２階に運びました。

まだまだ思い出はありますが体力が続きませんので失礼いたします。

2018年７月９日

古本凡夫氏インタビュー

2017年9月1日収録、場所：松濤美術館、聞き手・要約：平泉

松濤美術館建設当時、渋谷区の建築公害部営繕課 第1営繕係の若手職員として建設に携わった古本凡夫（こもとただお）氏は、上司である佐藤克弥氏（PP.23～24）などのことも含め、当時のことを詳細に記憶しておられた。

〇白井晟一と建築について

自分たちのような建築屋（古本氏自身は20代で一級建築士の資格を取得）と、白井の建築への入り方はちょっと違っていた。白井にとって建築は自分の夢（より大きなヴィジョン）を実現するため手段であった。白井自身も自分の事務所のことを、建築事務所とは呼ばず、研究所と呼んでいたのではなかったか。

〇松濤美術館建設にあたった株式会社竹中工務店について

白井晟一の要望もあり、競争入札の結果、株式会社竹中工務店があたることになった。あれほどの大企業であれば、中に職人集団を擁していて、その高い技術をもつ職人でないと、白井の意図を実現できない、ということがあった。白井のご指名の職人たちがいた。職人たちも、白井のためならと意気に感じてやってくれるところもあった。

そもそも細かい図面が無い。白井が大枠で指示し、現場で竹中工務店と白井の弟子の柿沼守利氏が細かい図面をつめていく。だがいざ建ってくるとアールが気にいらないといって、落とさせ、やり直しということもあった。螺旋階段も、職人の一人が白井の思うカーヴが何度やっても実現できずノイローゼのようになっていた。

松濤美術館の建設を遂行した天野房三区長は、いくつもの公共建築をつくったが、美術館はあくまで特殊ケースで、文化的な建物で長く残っていく、という判断だったと思う。実際、自分が在職時に携わった多くの公共建築は、今日もう役割を終えて取り壊されており、松濤美術館の建築に関われてよかったと思っている。

〇渋谷区営繕課の佐藤克弥氏について

建築家として白井晟一が決まったあと、白井から区側の人間ですぐ決断ができる人をつけてほしいとのことで、当時営繕課の係長であった佐藤克弥氏が選定された。白井の側も異存ない人選だった。佐藤氏というのは現場の親方タイプの実直な人で、言を異にすることがなく、信頼がおけたのだろう。ただ一係長である佐藤氏が決断できるわけではないので、何か白井から言われると、佐藤氏が天野区長にダイレクトに電話して区長が決断するという形。職場で白井からの電話を受けると、その後の佐藤氏の電話の受話器は、緊張でかいた汗でベタベタになっていた。それなのに用件は、渋谷の行きつけの店でポマードを買ってきて欲しいというもののときもあった。

〇白井晟一の姿勢について

自分の意志が通らないことがあると、すぐ「この建物から私の名前を外してください」と言い出す。そういったことが何度もあった。怒鳴るとか声を大きくすることもないが、断固とした感じ。白井が何かを言い出すときは、非常に深い考えがあってのこと。そのなかで、例えれば、円が楕円になるということはあっても、円形で行くということは決まっていて、ぶれることはない。気まぐれに言っているのではないのである。

○白井晟一の最後の弟子の柿沼守利氏について

ほぼ毎日建築現場に来ていた。白井は上記のように大まかなドローイングで示すだけなので、細かい図面を書いたり、区の佐藤克弥氏、竹中工務店と白井の間にたって、つなぐ役割を果たしていたのは柿沼氏。けれど柿沼氏は無給に近かったのではないか。

佐藤克弥氏は週一くらいで現場に行く感じ。白井も節目節目では行っていた。

美術館完成後、営繕課の職員で白井の労をねぎらう宴が催された。自分もワリカン要員でかり出された。パルコのステーキの店で、みな結構な負担だったと思う。ところが、店の前に到着した白井が、一緒にいた柿沼氏に「お前は帰りなさい」という。聞けば、弟子とは一緒に食事をしない、ということだった。(実際には白井は柿沼氏に自らの手料理を振舞うこともあり、一緒に食事をしないということはなかったという)帰ろうとする柿沼氏に、職員たちで白井を取りなすからと説得したが、柿沼氏は、「白井先生は一度言い出したら聞かない、自分が出ると、おそらく先生自身が帰ってしまうから」、と言って帰っていった。

ただその後の食事会は和やかだった。みな白井の隣に座るのが嫌で、押し付け合っていたものの、営繕の職員たちは白井の過去の建築をいろいろ勉強してきて、そのことに関してさかんに質問していた。白井はいつもは眼光鋭く威厳があり、お洒落な人物。でもこの晩は「僕は鳩の目だよ」などと言っていた。自分は「君はなかなか面白いね。こんど家に遊びにいらっしゃい」と言われた。柿沼氏に聞くと、白井がそのようなことを人に言うことはほとんどないということだった。白井は昼夜逆転の生活を送っていると聞いていて、そのこともあって実際家に行くことはなかったが、行ったらどんなであっただろうと、今、心残りではある。

○松濤美術館の建築について

松濤美術館の土地は第２種住居地域という区分にあたっていて、いろいろな制約があった。当時の美術館建築に対する意識の中でも、展示室の中に喫茶室を置くこと、中心部に池を置くことなどは異例ではあったと思うが、白井はそれらを知らなかったわけではなく、すべて承知のうえでやっていたと思う。美術品というのはどのような環境で見るべきかという白井なりの信念があってやったことだと思う。

ブリッジについても手すりがぎりぎりまで低くしてある。白井は当初は手すりは無くてもいいとすら言っていた。白井自身は確かに手すりが無くても、落ちずに渡れる人なのだと思う。

美術館が出来上がってくると照明器具等は白井が秋葉原の電気店まで行って選んだという。調度にもこだわり、館長室(会議室)に置かれている机を営繕の職員で運んでいるとき、値段を聞いて、机にそれほどの高額を費やすことがあるのかと、びっくりした覚えがある。

鏡も後から白井が選んできたもの。枠が海外製の高価なもので、自分も含めた営繕の職員たちが、夜中に呼び出されてドリルで壁に穴をあけて取り付け作業をした。工事費に含まれていないものだから竹中工務店にやらせるわけにはいかなかった。実は工事期間が延びて、工期も間に合っていなかった。完成ということにして、中で内装の工事などを続けていた。

○松濤美術館の開館後

たいした宣伝もしないのに早稲田大学の理工の谷資信研究室などから見学依頼があり、反響が大きくてびっくりした。渋谷区としては、まず美の館としての建築を建てたので、建築があればいいという思いはあったと思う。

ただ、その後の年月のなかでは展覧会をやることや展示品のことが強調され、白井建築という面がその背後にまわされ、目立たなくなってしまったようでもあった。

数年前、パナソニック電工汐留美術館などで白井晟一展(「白井晟一 精神と空間」展、パナソニック電工汐留ミュージアム、2011年１月８日～３月27日)が開催され、柿沼氏や佐藤克弥さんは、松濤美術館でも白井の展覧会をやってくれないものかと言っていた。もしそんな話があれば、二人にとってどれほど希望となることか。

建築は補修のために10年単位で改修をしていかねばならない。白井晟一の美術館建築は特別だということで、営繕の中でも引き継ぐようにしてきた。今後の改修の際にもなるべく白井の当初の案を残すようにしていってほしい。

建設当時の日々は、スーツで現場に行ったら、建物に潜れと言われ、そのまま潜って泥だらけになったりと大変であったが、白井晟一の美術館建築に携われたことは、建築屋として大変幸福なことだと思っている。

1980年頃　営繕課職員による慰労会での白井晟一
画像提供:古本凡夫氏

中澤正氏インタビュー

2021年5月26日収録、場所：松濤美術館、聞き手・要約：木原

1980年当時、弱冠27才だった中澤氏。株式会社竹中工務店入社４年目にして松濤美術館の図面作成と施工を担当することになり、その後、2013年の大改修工事では建設当時を知る担当者として竹中工務店の指揮を執っている。今回のインタビューでは、図面作成時のこと、白井晟一との思い出などを手短にお話しいただいた。中澤氏は2021年に当館がコンタクトを取った段階ではすでにご体調を崩されており、展覧会開幕直後の2021年10月、惜しくもご逝去された。

〇白井晟一の印象

詳細図を作成する際に白井の承認を得る必要があるため、白井晟一研究所には何度か通っていた。当時、世間で白井は哲学者だと言われていたため、一般的な建築家とは違う偏屈な人なのかと思っていたが、会ってみるとそうではなく、優しいお爺さんのような印象を受けた。

記憶に残っているのは、白井の生活時間が昼夜逆のため、現地確認が夜（深夜）となるので対応が大変だったこと。来場時「腹が減ったので蕎麦でも食べよう」と言い出し、やっている店を探し出すのが大変だった。

〇渋谷区の営繕課と竹中工務店の分業について

白井晟一研究所からデッサンやドローイングなどでイメージが提示され、竹中工務店はそれを受けて、一般図、基本計画図から詳細図に至るまでのほぼすべての図面を作成した。白井は全く図面を書いていなかったが、柿沼氏は少し書いていたように思う。渋谷区営繕課は図面通りに実物ができているかをチェックする施工監理が担当だった。ただ、松濤美術館はかなり特殊な工事だったので、通例とは違って佐藤克弥氏ら営繕課の職員も最初の基本計画図の作成段階から会議に参加して、意見を述べていた。

〇松濤美術館のデッサンやドローイングは、どのようなものか

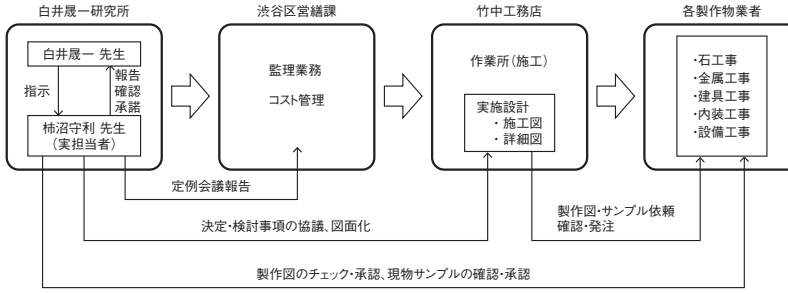
私が見た範囲では、基本図のもとになるスケッチやドローイングは、カレンダーの裏に白井が手描きしていた。ディテールなど断片的なイメージデッサンは図面用の紙ではなく、Ａ３程度のその辺にある紙を使用していた。

〇白井晟一研究所のデザイン・プロセス

事務所では粘土模型を作成していた。数回の手直しを行いながら最終形態まで仕上げていく。昔はどこの建築事務所でもよくやられていた手法だが、当時ですら他の建築事務所ではあまり使われなくなっていた。CADが登場した現代に至っては完全にすたれてしまったのではないか。当時、模型を製作した柿沼氏と二人で夜な夜な松濤美術館の屋根の形状を計測したことがある。模型の曲面形状を、粘土を少しずつ切りとりながら図面に落とし込んでいくため、出来上がった段階で模型はバラバラに解体されてしまっていた。

中澤氏提供の工事組織図

松濤美術館　組織デザイン



瀬尾典昭氏インタビュー

瀬尾氏は1981年、開館準備室に入り、2016年まで35年間、松濤美術館に学芸員として勤務された。今回のインタビューでは初期の様子や展示の苦労を中心にお伺いした。

2022年1月13日収録、場所：吉祥寺駅南口某所、聞き手：平泉・木原、要約：木原

〇着任当時の様子

私は４月、準備室の時に入った。建物が出来たのがその半年から１年前だと思う。その時には事務組織しかなく、館長、副館長、係長。あとは設備の人など全部で６人の職員がいた。

東京国立博物館から初代の藤田國雄館長が着任して、藤田館長のつてで私が呼ばれ、もう一人の学芸員、近藤秀實さんが静嘉堂文庫から移ってきた。美術館の運営方針は美術館建設懇談会が決めており、私は方針や事業内容が話し合われた後に入って、それを踏まえて細部を決定していった。

土方定一以下、懇談会メンバーは開館してから一切登場することはなかった。白井が美術館に来たことも私は１回しか知らないし、彼はオープニングの時も来ていなかった。

〇事業内容について

展覧会は藤田館長・近藤・瀬尾の3人で話し合って決めていった。外部のキュレーターや研究者によるプランなど、3年分くらいは館長が企画を考えていたが、実際には1年目の途中で終わり、2年目からは学芸員がプランを出すようになっていった。

美術教室と美術相談（画家を講師として、一般の人が絵を描くときの方法についてアドバイスを受ける。自分の描いた絵を講評してもらうこともできた）、小中学生絵画展、公募展の実施も最初から決まっていた。

〇各室の用途について

館長室（白井の図面上では「会議室」）は最初から館長室として使っていた。現在もついているサインは81年当時のもの。

当初、学芸員室は図書室を兼ねていて、学芸員が実際に仕事をしている同じ部屋に、図書利用者は自由に入ることができた。

地下２階のホールは講演会、美術相談、美術教室のほか、映画上映もやっていた。展覧会に合わせた内容や子ども用のアニメなど、その都度ビデオを買い足して月2回ほど上映した。

○着任当時の建物の様子

当初は仮設壁などの造作は一切なかったが、開館の10月までに藤田館長が指示して、外光が入らないよう地下１階展示室の窓に黒いブラインドを設置し、サロンミューゼの窓には最初から用意されていた木のすだれをかけた。壁側に設置した最初の仮設壁は簡易的なパネルだった。地下１階がメインの会場だったということもあり、２階に仮設壁ができたのは比較的遅かったのではないか。開館してすぐは、どちらの展示室でも吹抜け側の窓には仮設壁を付けていなかった。

○当時の建築への評価

最初のうち、来館者は建築関係の人が多く、評判は良かった。しかし展示施設としては問題があり、使いにくいと、藤田館長はじめ我々職員は考えていた。

○瀬尾氏は白井建築をどのように考えていたか

白井の建物は好きだし、とくに「原爆堂計画」(1954～55年)は実現すればよかったと思う。

しかし松濤美術館に関しては展示が難しく、円形なので動線を作るのが難しい。また、地下１階と２階の空間の性格が違うために、展示構成との兼ね合いも、自分にとっては難しかった。

○展示の工夫について

壁面長が短かったので、資料的な展示はロビーに出したりしてすこしでも展示空間を確保するようにしていた。

我々が着任する前、準備室の職員がひろしま美術館に見学に行ったらしい。しかし、そこは壁の湾曲が松濤よりも緩かったため、仮設壁を立てていないからきれいではあったが、展示方法の参考にすることはできなかった。松濤美術館は、「三木富雄」展(1992年12月２日～1993年１月24日)などの彫刻やインスタレーション作品は空間と親和性があってきれいに展示することができた。また、作品一つ一つがそこまで大きくない「没後90年 ガランスの悦楽 村山槐多」展(2009年12月１日～2010年１月24日)のときなどには、躯体の壁に直接作品をかけていた。壁や空間を含めて見せる展覧会と、そうではない(仮設壁を利用する)展覧会とを分けて考えるようにしていた。ただ、いずれにしても白井建築の特異な空間性をうまく引き出せるように意識した。

「開館記念 特別展 森芳雄」
(1981年10月１日～11月７日)展示風景

中村文明氏インタビュー

2021年４月21日収録、場所：松濤美術館、聞き手・要約：平泉・木原

松濤美術館の開館当初の管理係（1980年８月着任）の職員であった中村文明氏より当時の様子に関するお話を伺った。

美術館建物が1980年５月に竣工後、同年８月に美術館準備室に着任した。準備室時代、開館前にも関わらず建築見学の学生が沢山来ていた。当初は空調管理に専属の業者等が来る構想だったが、この話がなくなり、若手の職員である自分がボイラー管理などに奮闘することとなった。

建物の竣工後、白井自身はあまり館を訪れることがなく、どちらかというと交流があったのは白井晟一研究所の柿沼守利氏のほうで、例えば、館正面にある水飲み場は水が出るようになっているが、ポタポタと垂らすように出して欲しい、などの指示はそこから聞いたものかもしれない。白井も数度は館に来たことがあったが、来ると地下２階の和室に直行し、そこでくつろいでいたという印象がある。白井は展示室にスイス製家具を使うなど、調度に大変なこだわりがあったが、職員の勤務する事務室に対しても、電話機の色までも細かい希望があったと聞いている。

1981年9月に初代館長に就任した藤田國雄氏（元東京国立博物館次長）は、松濤美術館の創設を主導した天野房三区長の絵の先生の紹介で来られたとのこと。あまり建築に対する関心はないようだった。開館後、そのままだと展示に使用できないということで、可動式の展示パネルや、２階サロンミューゼには日よけのすだれ等が導入されていった。可動式のパネルは展示の度に職員皆で担ぎ上げていた。

1981年10月の最初の開館の式典は華やかだったが、その後とにかく人が来なかった。２階のサロンミューゼにある喫茶室の経営も苦しかった。一方で２階の学芸員室の半分は図書室として一般に開放していたり、地下２階のホールでは美術教室や毎週16㎜のフィルムやビデオによる映写会をやっていたりで、催し事は多かった。皆若く、手探り状態だった。

建物のちから―松濤美術館50周年への期待

渋谷区立松濤美術館前副館長(2011年４月１日～2022年１月31日)　高波眞知子

東日本大震災が起こった直後の2011年4月に松濤美術館に着任した。電力節減のため吹き抜けの噴水は止まり、ライティングもされておらず開館時間も短縮していた。建築も働いている職員の様子も沈んでいるようにみえた。

開館から30年を経て、空調設備や建物も改修が必要な時期を迎えていた。改修には多額の経費がかかる。難しい局面を迎え、運営の改善も求められていた。

前職の東京都庭園美術館は旧朝香宮邸を活用し1983年に開館した。邸宅を展示施設として使用することは他では得られない効果がある一方で、建築保存ゆえの不自由さもあった。2000年代に入り、東京都による有識者会議の結果、旧宮家の邸宅建築が高く評価され、結果、歴史的建造物に対応した改修が施された。美術館施設のための空調設備も整えられ、アール・デコ様式の本館(東京都指定有形文化財(建造物))はその室内装飾を活かした展示を行い、これを補う展示のために新館を新築するという大改修工事が行われた。2015年には国の重要文化財に指定という理想的な展開となった。長年、宮家当時からの関係者や美術館関係者も旧宮邸保存に尽力してきたが、このときほど建築そのものが持つ「建物のちから」を感じたことはなかった。

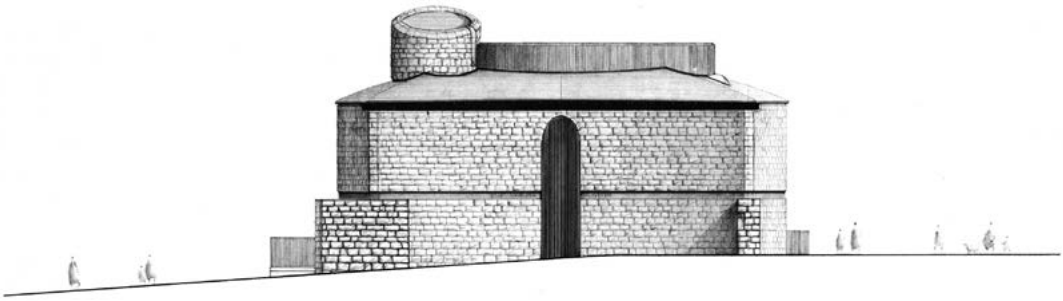
松濤美術館に立ち戻ってみよう。区立美術館の建設の実現は美術に親しんでいた当時の天野房三区長によるところが大きい。建設準備懇談会には神奈川県立近代美術館館長土方定一を中心に、渋谷区にゆかりのある芸術家など有識者が集められ、建築家白井晟一もそのメンバーに名を連ねていた。白井は美術館建設としては、狭い住宅地という制限のある土地に、渋谷区の求める機能を盛り込みつつ、自らの目指した美術館を完成させた。40周年記念「白井晟一入門」展第２部で体感していただいたのが、まさに白井晟一が創り上げた美術館建築空間だ。吹き抜けに面する窓からは時間経過とともに変化する光が館内に差し込み、楕円形でエンドレスな回遊式動線が狭小さを克服している。またブリッジや４層各階の人々の動きが相互にみてとれるという、内省的と評される白井建築としては、人とのつながりが感じられる意外な発見が驚きでもあった。あたかも建築を舞台としたリアルタイムの映像作品といえる光景が繰り広げられていた。

開館当初から長年、展覧会活動には使いにくい建築ということが、内部的には大方の認識であったようである。しかし外部から来た新鮮な目で、庭園美術館と同様の建築のポテンシャルを確信したため、2013年の大規模改修後、新たに建築ツアーを開始し建築への関心を高めた。それは図らずも開館40周年白井晟一入門展への助走となった。担当学芸員の奮闘もあり、展覧会の結果、建築関係者だけではなく一般の関心も引き寄せたという実感を得た。近年、前川國男や吉阪隆正などの設計による昭和３，40年代の建築が文化財に選定されてきている。松濤美術館も将来的には昭和の建築として保存すべきと認識・評価されていくと考えられる。これからの10年、50周年に向けての取り組みに期待したい。

渋谷区立松濤美術館 開館40周年記念
白井晟一入門
第１部／白井晟一クロニクル　2021年10月23日（土）～12月12日（日）
第２部／Back to 1981　建物公開　2022年１月４日（火）～１月30日（日）
主催：渋谷区立松濤美術館、読売新聞社、美術館連絡協議会
協賛：ライオン、DNP大日本印刷、損保ジャパン、日本テレビ放送網
助成：公益財団法人 ポーラ美術振興財団

渋谷区立松濤美術館 開館40周年記念
白井晟一入門 第２部 Back to 1981 記念記録集

編集・発行：渋谷区立松濤美術館
〒150-0046 東京都渋谷区松濤2-14-14
制作・印刷：株式会社光和印刷
発行日：2022（令和４）年３月31日
©渋谷区立松濤美術館



《渋谷区立松濤美術館 立面図》白井晟一研究所蔵